

縄文期のかご復元



出土した遺物の編みかご（左下）と復元作業中の編みかご＝佐賀市本庄町の市文化財資料館

東名遺跡研究グループ

約7千年前の縄文時代の貝塚の中で、国内最大級の規模を誇る佐賀市の東名遺跡。その遺物として大量に出土した編みかごの復元作業を、東北大の鈴木三男教授（植物学）らでつくる研究グループが8日、報道陣に公開した。鈴木教授は「非常に丈夫で実用性があり、縄文人の知恵や当時の製作技術の高さがうかがえる」としている。

東名遺跡は、同市金立町 総面積は約1700平方メートルの田園地帯にある遺跡。国と縄文時代早期としては国内最古級の湿地性貝塚で、内最大級。2004～05年

技術高く「丈夫で実用性」

の発掘調査で、木やツルを使った編みかごが大量に見つかっている。

復元には市教委も協力。約3年前から材料の準備を始め、今月6日から作業に入った。

実際に復元することで目指すのが、当時の生活や技術などの解明。当時の主食とされるドングリの貯蔵用に使ったと考えられ、素材は九州地方にも自生する広葉樹のムクロジとイヌビワを裂いたものなどを使ったことが研究で判明した。立体的に復元する過程で、複雑な編み目や線状の装飾も確認されている。

同じ2種類の素材を使って復元し、完成予定の編みかごは、高さは80～85センチ、最大幅は35～38センチほど。同グループは遺物の編み目を図に記し、配置や組み上げる回数を計算したという。「当時からあらかじめ組み方を計算をしていないと完成は難しい。数の概念が当時あった可能性もある」と話している。年内の完成を目指し、完成品は一般公開する予定。

（甲斐弘史）

7000年前の編みかご復元

東名遺跡で出土 縄文人の文化解明へ

国内最古級の湿地性貝塚、東名遺跡（佐賀市金立町）から出土した約7000年前の縄文時代の編みかごの復元作業が8日、佐賀市本庄町の市文化財資料館で行われた。

作業を公開したのは、研



縄文時代の編みかごを復元する造形作家

木やツルで作った編みかごや破片約700点が出土した。研究会が素材などを調べたところ、ムクロジとイヌビワの木材を裂いた「へぎ材」を使っていることが分かった。

二つの樹木は九州に自生しているが、編みかごに使われた例はほとんどなく、製作道具が石器しかない縄文時代にへぎ材を作る技術はきわめて高度だとして、縄文人の技術や生活、文化の解明につなげようと復元を計画した。へぎ材は、大分県日田市と宮崎市で収集した木材を使い、秋田県角館市の伝統工芸士に委託して作ってもらった。

復元に挑戦したのは、当時重要な食料だったドングリを貯蔵していたと見られるポーリングのピンに似た形の編みかご。高さ約90センチ、幅約60センチ、口径約23センチのサイズで、出土品と同様にムクロジとイヌビワを使って、2個作成する。

作業は6日から始まり、研究会のメンバーのほか、東京都などのかごの造形作

家2人が加わり、出土品の実測図を見ながら編んでいた。

完成後は、東名遺跡を紹介する東名縄文館（佐賀市金立町）で展示する予定。製作した、かご造形作家の高宮紀子さん（58）は「実際に再現してみても、当時の技術の高さがうかがえました」と話していた。

佐賀市東名遺跡出土

7000年前の
編み籠復元



東名遺跡からの出土品(手前)を参考に、7000年前と同じ製法で作った木製編み籠—佐賀市本庄町の市文化財資料館

佐賀市

佐賀市金立町の東名(ひがしみょう)遺跡から出土した7000年前の木製編み籠(かご)の復元製作実験が8日、佐賀市文化財資料館で公開され

た。籠は当時、主要な食糧だったドングリを水漬けて貯蔵するために使用したと考えられ、関係者が縄文人の高い技術力や生活状況に思いをはせた。

あみもの「縄文人の知恵に驚き」研究会

実験は、2004年から出土した籠の素材や編み方、用途を研究してきた「あみもの研究会」(会長＝鈴木三男・東北大植物園教授)が企画し、佐賀市教委が協力。調査の結果、編みやすい竹やササではなく、ムクロジやイヌビワの樹木を裂いてテープ状にした「へぎ材」が使われたことが分かっている。

ただ、へぎ材の製作技術はほとんど廃れており、秋田県角館市の伝統工芸士に素材作りを委託。出土品からおこした実測図をもとに、3日間をかけて当時と同じ素材、製法で編み込み、フジのツルを使った装飾も忠実に再現した。鈴木教授は「縄文時代には製作道具として石器しかなかったのに、へぎ材を作った知恵や技術に驚かされる。複数のへぎ材を規則正しくねじっ

たり、挟み込んだ網代編みやござ目で作られており、縄文人に『数の概念』があったことがうかがえる」と話す。東名遺跡からは、国内最古の湿地性貝塚(縄文時代早期)や大量の木製編み籠、くしなどが見つかっている。

(藤生雄一郎)